若林　敦

読書の愉悦

『〈問い〉の読書術』
大澤真幸／朝日新書

ブックガイドで「ブックガイド」を紹介するのはいささか気が引けるのだが、この本はなかなか面白かった。これは、著者がウェブ版の書評コーナーに2014年３月までの３年間ほぼ月一回のペースで掲載した文章から25本をまとめたものである。この書評コーナーの特徴は二つあって、一つは新刊書に限らず好きな本を選んでよいこと、もう一つは字数に制限がないこと。だから、本の選択には現代という時代や時々の社会情勢を強く意識した面があり、また多くの書評で字数を費やして本の内容を紹介している。これが、この本の面白さのもとにある。その上で著者の批評が展開される。それが書評を通じた社会や思想、文化の批評となっているところがよい。著者の大澤氏は社会学者であるとともに、ジャーナリズムで活躍する言論人でもある。氏の本格的な理論的・思想的著作は読むのになかなか骨が折れるのだが、書評という形は氏の著作を支える考え方や発想をわかりやすく読者に示してくれている。それは必ずや読者に現代社会への〈問い〉をもたらしてくれるはずだ。

例をいくつか挙げてみよう。まず書評の中で興味深かった論点（書評対象本の趣旨からは外れることもある）を示し、次に私の感想を（◆）述べる。

「市場はなぜ道徳を締め出すのか　マイケル・サンデル『それをお金で買いますか－市場主義の限界』」（「第１章　経済と規範」より）：われわれが望んでいるのは市場経済なのか、市場社会なのか。市場経済とは、生産活動・交換活動を統制する道具である。市場社会というのは、人間の営みのすべての側面に市場価値が浸透している生活様式である。市場社会では、すべての社会関係のひな型が、市場での取引になる。そこで「市場による道徳の締め出し」（サンデル）という現象が拡がるならば、善さを基準とするわれわれの行動は社会から失われてしまうかもしれない。

◆たとえば、臓器移植は「命のリレー」とも呼ばれるように、提供する側にはそれが相手の命を救う善いこととの思いがある。これに対して移植臓器の売買という行為を想定してみたらよい。それが無償であった時と比べて、そこでは善いことを為すという目的（価値）が損なわれていないだろうか。もし私たちがこのよ

うな売買を不純と感じるとしたら、それはいったい何によるのだろう（本書に大澤氏の考えがある）。同じことはお金を払うセックスにも言える。私たちが大切にしたい、かけがえのないと感じているものがお金を媒介とする取引によって損なわれる。私たちが市場経済をコントロールできず、その拡がりを放置する（あらゆるものを商品化する）ことで現れる社会がどのようなものなのか。それをリアルに想像することができる。

「米史の中から無念の敗者を叩き起こすとは　オリバー・ストーン＆ピーター・カズニック『オリバー・ストーンが語る　もうひとつのアメリカ』」（「第２章　世界史と革命」より）：冷戦は防げたかもしれない。だが、現実の歴史では冷戦が形成され、核兵器の開発競争、軍拡競争を招いた。それはつまり歴史の中に敗者がいたということだ。冷戦そのものを消滅させ得たかも知れない人物がいた、そのような試みがあったのだが、その志を果たすことができず敗北した。少なくとも三つの決定的瞬間があった。分岐点の一。1986年10月、ゴルバチョフ書記長（ソ連）とレーガン大統領（米）によるレイキャビク会談。このとき、ゴルバチョフはきわめて大胆な提案をした。一緒になって核兵器を全廃しようという提案である。しかし、レーガンは、当時「スターウォーズ計画」とも呼ばれた「戦略防衛構想（ＳＤＩ）」に固執して、研究室内であればＳＤＩの実験をしてもよいとまで譲歩したゴルバチョフの提案を拒否した。レーガンのチームにいた国務長官ジョージ・シュルツ、軍備管理担当特別顧問ポール・ニッツェは受け入れることを主張したが、国防次官補リチャード・パールは反対で、レーガンはパールのアドバイスに従ったのである。最後の会議が終わり会場から車へ歩いていくときまでねばるゴルバチョフにレーガンの返事は否定的なものだった。この時、ゴルバチョフは敗北した。分岐点の二は1963年11月22日、ケネディ大統領が暗殺された瞬間。そして、分岐点の三は1944年７月の民主党シカゴ全国大会でヘンリー・ウォレスが副大統領候補の指名を得られなかったとき。ウォレスは20世紀が「アメリカの世紀」になるのだとすれば、それはダメであり、20世紀は「人々の世紀」にならなければならないというような反帝国主義の見解を公言する人物で、国内外で人気があり、

あらゆる植民地の解放を主張していた。第３期ルーズベルト政権で副大統領を務めていた彼は、ルーズベルトが異例の第４期の大統領を目指すことになったとき、副大統領に就任するのがごく自然であった。また、直前の調査でも民主党選挙人候補の65％がウォレスを推していた。ところが、大会では反対派の有力者たちの画策によって指名が阻止され、ウォレスは敗北した。代わって指名されたのがハリー・トルーマン。ルーズベルトが大統領就任後わずか80日余で亡くなったため、45年４月に大統領に昇格し、広島、長崎への原爆投下を決定した人物である。さて、われわれにとって大切なことは、このような歴史の敗者の願望を知ることである。それは現実の歴史が歩んだのとは〈別のルート〉を実現していたかもしれない。そのことを知って、もしその願望がわれわれの心の中に残ることがあるとすれば、それを実現するためにわれわれは行動しなくてはならない。

◆私たちが生きている時代や社会は与えられたものとしてある。私たちは好むと好まざるとにかかわらずその中に生まれてきたのである。しかし、その時代や社会は先人たちによってつくられてきたものでもある。そして、歴史はそれがどのようにつくられてきたのかを記述する。そこでは「もし○○であったなら、△△だったであろう」という語り方はない。だから、歴史の現実を形作らなかった人物や試みは次第に忘れ去られてゆく。だが､歴史の中には私たちが生きている「今」とは違う現実を実現しようとする人物も試みもそれこそ無数にあったはずである。それが実際に権力を握り、社会を動かし、現実を変えることのできた政治家やその試みであれば､「今」とは違う「別の現実」がもしかしたらほんとうになっていたかもしれないと思わせる。その志を知ることは、私たちにあらためて政治指導者の役割や政治の重要性を教えてくれるだろう。そして、そこに私たちが政治に関わる意味もある。去年12月14日に行われた衆議院選挙の投票率が戦後最低を記録した（52.66％）ことは、この点からも考えられてよい。私たちはどのようにしたら願望を政治に託せるのか、また、歴史を形作っていけるのかと。

「『ＫＹ』の呪縛から逃れられるか　山本七平『空気』の研究」(「第３章　現代社会と人間関係」より)：「ＫＹ＝空気を読まない」などという語を生んだ現在の

日本、本書の出版から40年近くを経た日本では、「空気」はますます猛威をふるっている。「空気」は論理的な推論や客観的な認識からは独立に、そして特定の個人の意思に必ずしも直接には規定されることなく醸成される。太平洋戦争末期に、戦艦大和の沖縄への出撃がデータや根拠から明らかに無謀であると判断されたにもかかわらず、「空気」(「一億特攻の魁（さきがけ）になれ！」）に支配された人々によって決定された。その結果、大方の予想通り、大和は沖縄に到着する前に撃沈され、３千人以上の乗組員が海に散った。このように「空気」に従うことはときに恐ろしい結果を生む。この「空気」の解毒剤は「水」である。沸騰する「空気」に「水を差す」、それはあられもない事実をまさに事実として言ってしまうことだ。その「水」＝事実に大方の賛同が得られれば、「空気」は萎（しぼ）む。だが、「空気」の支配とは、その事実を知りながら、しかしあえて……という形で人々が「空気」に順応し、それを維持していることで成り立っている。この時人々が「これしかない」という切迫した状態にあるならば、「水を差す」ことは効果を発揮するどころか、むしろ周囲の怒りを買うだけだ。これに対し、人々がそれは他にもあると思うことができれば、事実の指摘は功を奏する。われわれは、自分自身を、自分の周囲を点検してみる必要がある。「それ」は「空気」によって支配されているだけではないかと。

◆今年１月５日の「朝日新聞」に「養老孟司さんと訪ねる理研」という記事が載っていた。理研（理化学研究所）は去年ＳＴＡＰ細胞騒動を引き起こした一方で、９月にiPS細胞を使った世界初の移植手術を成功させてもいる。その訪問を終えた養老氏の感想が、訪問記事とは別にある。見出しは「日本人に合わぬ決定システム」。以下はそこからの引用。「ごく少数の研究者に予算と権限を与え、裁量を持たせる今の」科学研究システムへの批判である。

「リーダーに決定権を委ねる手法は、日本人には向かない面がある。自己という主体が自由意思に基づいて物事を決める、というのは近代欧米の考え方。日本人は思考方法が根本的に違うため、無理が生じる。／日本社会は、その場の状況に応じて自然と物事を決めていく「状況依存」をよしとしてきた。（略）その結果、最近よく聞く「説明責任を果たせない」ということになる。／しかし、説明責任

とはなんだろうか。その時、その場にいる人たちは、総体として最も妥当で合理的な判断に至ろうとする。強く主張する人もいれば、場に流される人もいるだろうが、多くの人が、与えられた状況下で周りの意思や空気をも尊重し、決断したことこそが、自然であり客観的といえるはずだ。」

日本社会（文化）の特質として大澤氏が否定的にとらえる「空気」が、ここではむしろ肯定的に語られているのがわかるだろう。「空気」のとらえ方が違うのである。大澤氏にとって「空気」はあくまで事実からかけ離れた非合理なものである。これに対し、養老氏は「空気」を尊重してなされた決断こそが客観的で合理的であるとする。何がこの違いをもたらしているのだろう。この二つはどちらかが正しい見方で、どちらかが正しくない見方なのであろうか。それこそ、私たちはそれぞれの見方の根拠にさかのぼって、事実に基づいた「空気」のとらえ方を、自分自身で考えねばなるまい。

と、まあこの調子でまだいくつも例をあげたいのだが、さすがにこの文章も長くなってきた。このように、読者が考えさせられる書評が揃っているのがこの本のいいところだ。それは、繰り返しになるが、書評という形で今日的なトピックが論じられ、そのようなトピックを引き出すことのできる、すなわち今の私たちが読んで価値のある本が取り上げられていることによる。「第５章　科学の迷宮」では理系の書物が４冊取り上げられている。アマゾンで「書籍リスト一覧」を見ることができる。

最後に本書の「まえがき」より。

「本をたくさん読む必要はない。（略）／しかし、本を深く読む必要はある。深い読み方に値する本は多くないかもしれない。だが、そうした本は、深く読まねばならない。／本を深く読むということは、どういうことか。読むことを通じて、あるいは読むことにおいて、世界への〈問い〉が開かれ、思考が触発される、ということである。（略）／（略）〈問い〉は、不意の来訪者のようなもので、最初はこちらをびっくりさせる。だが、その来訪者と対話することは、つまり、〈問い〉が促すままに思考することは、やがて、この上ない愉悦につながる。自分の世界

が拡がるのを実感するからである。」

唐突だが、これに村上春樹の次の言葉を並べてみよう。去年11月、ドイツのウェルト文学賞授賞式でのスピーチの一節である。（注）

「世界には多くの種類の壁があります。民族、宗教、不寛容、原理主義、強欲、そして不安といった壁です。私たちは壁というシステムなしには生きられないのでしょうか。小説家にとって壁は突き破らなければならない障害です。例えて言えば、小説を書くときに現実と非現実、意識と無意識を分ける壁を通り抜けるのです。反対側にある世界を見て自分たちの側に戻り、見たものを作品で詳細に描写する。それが、私たち小説家が日々やっている仕事なのです。

フィクションを読んで深く感動し、興奮するとき、その人は作者と一緒に壁を突破したといえます。本を読み終えても、もちろん基本的には読み始めたときと同じ場所にいます。取り巻く現実は変わらないし、実際の問題は何も解決していません。それでもはっきりとどこかに行って帰って来たように感じます。ほんの短い距離、10センチか20センチであれ、最初の場所とは違う所に来たという感覚になります。そういう感覚を経験することこそが、読書に最も重要で欠かせないことだと考えてきました。（略）

ジョン・レノンがかつて歌ったように、私たち誰もが想像する力を持っています。暴力的でシニカルな現実を前に、それはか弱く、はかない希望に見えるかもしれません。でもくじけずに、より良い、より自由な世界についての物語を語り続ける静かで息の長い努力をすること。一人一人の想像する力は、そこから見いだされるのです。」

本を読み終えたときに世界への〈問い〉が開かれ、思考が触発されて自分の世界が拡がるということ。物語を読み終えたとき、たとえわずかでも最初の場所とは違う所に来たという感覚になり、より良い、より自由な世界への想像力が刺激されるということ。この二つは重ならないだろうか。

読書というのは不思議な経験である。その悦びをぜひあなたにも。

（注）「村上春樹さんウェルト文学賞受賞記念スピーチの詳報」、「西日本新聞」2014年11月８日、http://www.nishinippon.co.jp/nnp/culture/article/125884、（参照2015-01-08）

執筆者紹介

若林　　敦

基盤共通教育部准教授。専門領域は、近・現代日本の文学と思想、言語技術教育。

『書名』　著者名　翻訳者名　出版社または文庫・シリーズ名　出版年　税込価格

『〈問い〉の読書術』大澤真幸著 朝日新聞出版（朝日新書）2014年 950円

『それをお金で買いますか：市場主義の限界』Michael Sandel著 鬼澤忍訳 早川書房 2012年 2,263円

『オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史１－２つの世界大戦と原爆投下』Oliver Stone, Peter Kuznick著 早川書房 2013年 2,160円

『オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史２－ケネディと世界存亡の危機』Oliver Stone, Peter Kuznick著 早川書房 2013年 2,160円

『オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史３－帝国の緩やかな黄昏』Oliver Stone, Peter Kuznick著 早川書房 2013年 2,376円

『「空気」の研究』山本七平著 文藝春秋（文春文庫）1983年 540円

ブックガイド目次へ